

機動歩兵

二次元ぷち文庫

ニケ

斐芝嘉和

表紙イラスト：Uたむき

試し読み版

MOBILE INFANTRY NIKE

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『機動歩兵ニケ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



機動歩兵

二丁

斐芝嘉和

表紙／ひなくま

登場人物紹介

Characters

ニケ

不撓不屈の闘志を秘めた金髪の美少女。人類を守る宇宙の戦士として、パワードスーツに身を包み異星人たちと戦う。

——永久に栄光満ちる歩兵よ

その名を輝かしめよ

ロジャー・ヤングの名を

撤退用小型宇宙艇の発信するビーコンが、甘い歌声でニケを誘う。

六時方向、五キロメートル。

振り向いてブースターを噴かせば数歩の距離だが、ニケはまっすぐ前を向いたまま引き金を引き続けた。

パタタ、パタタ！

凶悪な口径とは不釣り合いなほど優しい音を響かせて、二十ミリ突撃機関砲が火を噴く。近接信管弾頭は丘を越えて押し寄せてくる蜘蛛モドキの真っ只中で炸裂し、黒光りする外骨格を引き裂いて細長い脚を吹き飛ばす。

宇宙歴一九五九年、銀河系に版図を広げつつあった人類は初めて敵性異星文明と遭遇した。BEMと名づけられたソレは蟲に似た姿形と社会制度を持ち、仲間以外の生き物は餌か、生きた孵卵器としか思っていない。

いくら人類が共存共栄を望んでいても、BEMは違う。動物的な本能のまま進化した連

中は自らの種の繁栄しか考えていない。

交渉の余地がない敵に対して自衛しているだけではジリ貧だ。連中を根絶やしにしなければ、人類が滅ぼされてしまう——こうして始まった宇宙戦争は、すでに半世紀以上続いていた。

BEEMは地中に巣を作り、しかも生物的構造が単純だから、少しくらい被爆しても活動し続ける。核兵器による空爆は、居住可能な惑星をわざわざ献上するようなものだ。

そこで導入されたのが、機動歩兵である。

機械式サポートシステムを有した重装甲服に可能な限りの武装を施し、単体で戦車師団とも渡りあえるよう訓練された、究極の陸戦ユニット。放射能汚染を最小限に喰い止めつつ確実に敵の数を減らせるのは、機動歩兵しかない。

最終的には敵の巣に分け入っての掃討作戦を行うことになるだろうが、敵の生態に関する情報が不足している現在のところはヒット&アウェイ——棺桶と俗称される個人用降下ポッドに詰め込まれて敵拠点に投入され、それぞれが可能な限りの破壊活動を行った後、無人の宇宙艇に乗り込んで脱出するという、戦術的には有効だが戦略的には効果不明の作戦にしか用いられていない。

(あと……七分！)

宇宙艇が発進するまでの時間を気にしながら、ニケは引き金を引き続けた。

ギチチ……ギチチ……。

サーベルのような顎を摺り合わせた蜘蛛モドキは仲間を吹き飛ばされても怯むことなく、丘を乗り越えて押し寄せてくる。大きさはチンパンジーほどしかないから一匹一匹はさほど強くはないが、群れを成せば脅威だ。

「アリス、まだ!？」

ヘッドアップディスプレイに映し出された残弾数を気にしつつ、ニケは背後の仲間へ声をかけた。

「もうちよつと……よし、保持完了!」

負傷兵を救助していたアリスが半分ひしゃげたパワードスーツを抱え、立ち上がった。中身の兵士は気を失っているが、心臓は動いている。誇り高い機動歩兵ならば、息をしている仲間を決して見捨てたりはしない。

「飛ぶわよ、ニケ!」

「了解ッ!」

アリスの声を合図に、ニケは機関砲を投げ捨て、同時にブースターを噴かせた。教本では固く禁じられている背面飛行だが、いまなら小隊長も大目に見てくれるだろう——と。

ヘッドアップディスプレイのレーダーに、高速で接近する物体が二体、映し出された。高度二十メートル、蜻蛉モドキか。蜘蛛の群れの左右を掠めて飛んでくる軌道は、ニケや

アリスではなく宇宙艇を目指しているようだ。

「クソッ！」

悪態を吐いたニケは空中で身を振り、バックバックに提げていたライフルを抜いた。照準器の映像がディスプレイに映し出されるのもどかしく、蜻蛉がいるはずの後方・低空へ向けて引き金を引く。

タタタッ！ タタタッ！

三点バーストで打ち出された劣化ウラン弾は、どうにか蜻蛉の羽を撃ち抜いたらしい。レーダーの輝点がひとつ脱落し、後方へ遠ざかっていく。

「なにしてるの、ニケ！ 早く！」

「分かってる！」

切迫したアリスの声に叫び返しつつ、ニケは焦土に着地した。脚部のサーボモーターが作動して衝撃を吸収し――。

ドドッ！

「くっ!？」

突然地面が割れて、体勢が崩れた。咄嗟にブースターを噴いたがジャンプギアとのタイミングが合わず、高度が取れない。

「ニケ!？」

「大丈夫、すぐに追いつくわ！」

叫んだものの、それが気休めにすぎないことはニケにも分かっていた。

撤退用の宇宙艇はプログラムで動いている。時間が来れば自動的にハッチを閉じ、放射線の置き土産を残しながら宇宙へ飛び出していく。五百メートル先に行くアリスはどうにか間に合うだろうが、ニケは無理だ。

(まあ、いいわ)

黒焦げたニセヤシの傍に着地したニケは、ライフルの先を上げ、照準器から送られてくる映像に目を凝らした。探すまでもなく、蜻蛉モドキの銀翅が斜め後方から現れる。

「ニケ、ニケッ！」

「ヴァルハラで待ってるわ、アリス」

別れの言葉を口にして、ニケは引き金を引いた。

* * *

蜻蛉モドキを撃墜して宇宙艇を逃がした後も、ニケは戦い続けた。Y型射出筒のロケット弾や腕に装備されている火炎放射器が尽きても、頑丈なパワードスーツを駆使して蜘蛛モドキを蹴り飛ばし、細長い脚をもぎ取って振り回して、息が切れるまで戦い続けた。

ギチチ、ギチチ！

蜘蛛たちの耳障りな鳴き声は前後左右から聞こえる。戦っているうちに揺り鉢状の谷間

繊細な菊膜に塗りつけられ、擦り込まれる温かなぬめり——ムカデに蹂躪された秘裂から溢れ、肌にピッタリ貼りついた薄膜を伝って、尻谷に到達した愛蜜。

ヌチュ、クチュ、ニユチ——淫らな粘液に濡れた薄膜が芋虫の鼻先に圧され、キュツと窄む排泄孔が執拗に揉みまくられた。いくつもの舌で尻穴をせせられているような、心地よくも恥ずかしい感覚が、一息ごとに大きくなる。

「ふう、は……ンお……」

舌のような感触は、尻穴だけには留まらなかった。

粘糸に引つ張られて伸びた腕や脚、悦びに打たれてくねる腰——弾む乳房、痾る乳首にも、汗に蒸れたインナースーツが貼りつき、ぬめって、むちゅ、ぴちゃ、にちよ、と舐めまくられているような感覚が閃く。

（感じない、感じてなんか、ない……私は、誇り高き地球軍の、優秀で、勇敢な、き……機動ほ、へ、い……）

秘裂から湧き上がる快感の細波に、抗う意識が蕩けていく。

毛虫の毒針に刺された乳房がもどかしく疼き、弾けんばかりに膨れあがった乳首が焼けつきそうなほど焦れる。

「も、ぶあ……ン、えお……」

淫棒に塞がれた口から溢れ出す甘い喘ぎが、尻穴に群がった芋虫たちの動きに同期。

ぬ、ちゅ——むちゅ、ぐぼっ！

おぞましい産卵管を押し出そうとしていた舌が、いつの間にかたくましい肉竿を舐め回していた。

味蕾を灼く肉の熱さをもっと感じたくて、平らに広がった舌が裏筋に密着する。味の濃い場所を求めてカリ首に絡みつき、滑らかな亀頭の額を撫で回す。

(な……なにを、してるんだ、私は……ああ、でも、でも……ッ！)
羞じらうニケを裏切つて、身体は淫らに燃えた。

形よい尻がクウツとうしろへ突き出され、牡を誘うように揺れ始める。

乳肌を舐め回す薄膜の感触がどうしようもないほど気持ちよく、胸を張って身体を捻り、ゆさり、ゆさり、と揺らしてしまふ。

「ギチッ！ キキキッ！」

頭の上で蜂が笑い、腹の動きを強めた。

ググポッ！ ググポッ！

口を犯した淫棒が勢いを増し、真っ赤にむくれた肉塊に喉奥を突きまくられる。

「む、むううっ!!」

荒々しい愛撫に舌が蕩け、首筋のうしろに眩い光が閃いた。

昂るニケを祝福するように——キュッ！ ゴワワッ！

「ふあつ!? ふ……えあああつ!!」

クリトリスに噛みついたムカデが無数の脚を激しく動かす、薄膜の下の粘膜花卉を小刻みに責め立てた。

クイツ! クイツ! と悦びに打たれて揺れる尻房の真ん中では緑の芋虫たちが頭をつき合わせ、ぬめる薄膜を硬い鼻先で押し、肛門を滅茶苦茶に揉み回す。

(あ、あああつ! だ、ダメ……そんな、激しく、され……たらあああつ!)
火照る乳房をタップタプ弾ませ、白い喉を反らせて喘ぐニケ。

打ち当たる乳谷にはいやらしい毒針を広げた芋虫が何匹も待ち構えていて、薄膜を貫いて乳肌を刺し、新たな淫毒を注入する。

「えあ、えああ、えあああつ!」

弾む柔肉の先で乳首が膨れ、痛いほど硬く痼り勃った。

感じやすい肉豆に絡みついた薄膜が跳ね躍る乳房に引つ張られ、甘噛みされたときのような悦びが何度も何度も炸裂する。

「ンえお、えお、えおお……あえつ!? あ、あ……ンごぼつ!」

口腔を犯した淫棒が燃えているように熱くなり、舌の上で太さと硬さ、長さを増した。クリトリスに噛みついたムカデが顎の力を強め、淫核に激感が炸裂。

無数の脚に掻き回されたビラビラには電流が渦巻く。

「もえあ、やあ、やうあああつ！ えふ、えふ、えええつ！ ふうう——つ！」
 感極まったニケが伸び上がり、長い金髪を振り乱して叫んだ瞬間——。

ビュクッ！

ビュククッ!!

ドピユツ！ ドピユツ！ ドピユツ！

喉奥に生臭い粘液が迸った。

食道に貼りつきながら垂れ落ちていく大きなダマ。

大量の白濁液は太い淫茎に埋め尽くされた口腔を逆流し、伸びきった唇からドロドロと溢れ出した。

(あ……ああ……イッて、しまっ……た……)

恍惚の余韻にぼんやりとしたニケの口から、真つ赤に染まった産卵管がゆつくりと引き抜かれた。涎混じりの白濁液が掻き出され、細い顎を伝って胸乳に滴る。

私も、先ほど見た女と同じように蟲の仔を孕み、腹を醜く膨らませた肉奴隷にされて、しまう、のか——。

ヒトとしての尊厳を踏み躪られたあの姿を思い描き、嫌悪を思い出そうとするのだが、できない。

淫棒に犯されていた口は、熱くて太い肉塊を引き抜かれてもなお、甘く痺れて蕩けていた。

真っ白な光が臉の裏に閃き、逆さになった身体が雷に打たれたように反り返る。

(だ、ダメ……感じては、ダ……め……)

わずかに残った理性が健気に抵抗するが、

ぐちゅちゅ、ちゅぷっ!

ぬちゃ、ぐちゅ、にちゅちゅっ!

蟲の涎に濡れた何本もの触手が、紅く潤んだ壺口をこじ開けて腔洞に潜り込んだ。木の芽のように硬い尖端でヒダヒダを掻き回し、細かな溝のひとつひとつに淫毒を擦り込む。

「うううっ!? ああ、うううっ! そ、そんな、は、はげ、し、くううっ!!」

繊細な腔膜がキュツ、キュツ、と抓られ、クチュクチュと摺り合わされた。硬い尖端に穿られ、震える背が揉みまкруられる。

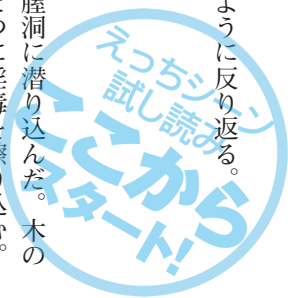
蜜壺の中に電流が渦巻き、蟲に抱き締められた身体がビクン、ビクン、と痙攣した。下を向く顔は淫らに弛み、甘い吐息をこぼす口からはねつとりした涎が溢れ出す。

「ふう、ああ、ううう……浮くう、浮くうう、浮いちや、ああ……うっ!!」

悶えるニケの鼻先、ブヨブヨした蟲の腹の真ん中に、スツと細い筋が生じた。筋の左右が盛り上がり、一瞬幼女の秘裂に似て、

——ぐちゅば。

粘液の糸を引きながら左右に開く。



「ひ……イイツ!!」

恍惚に弛みかけていたニケの顔が強張り、引き攣った喉から掠れた悲鳴が漏れた。幼気な秘裂の奥に蠢いていたのは、肉イボを生やしたペニス型触手の群れ。

「い、いや、やめ……ンぷっ!! ン、おあっ!!」

白い潤みの中央から伸び出した太い触手がニケの唇をこじ開け、口の中へ潜り込んできた。いつも這い込んでくる芋虫よりも細いが、硬い。猛々しく膨れた亀頭やくねる肉茎にはコリコリした肉イボがいくつも生え、舌や上顎、頬の粘膜が揉みまくられた。

「ン、ンお……もっ!! むううっ!! む、ンむう……ッ!」

ぐぶちゅっ! ぐりゅりゅっ!

小指より細い触手が左の鼻の穴に押しつけられ、コリコリした尖端が潜り込んでくる。

生臭い粘液に濡れた肉紐に臉を撫でられ、頬を舐められた。

くねる触手はニケの顔を包み込むように広がり、金色の髪の中を泳いで頭を一周。

香汗の滲んだ耳裏に生温かなぬめりが塗りつけられ、耳の穴にも小さな亀頭がクポ、クポ、とはまる。

（い、いや……耳はいや、ダメええっ!）

悲鳴を上げたつもりだが、肉イボ触手に喉を塞がれているために涎混じりの呻き声しか漏れなかった。拳で蟲の胸を叩き、逆さになった身体を懸命に揺らして逃れようとしても、

背に回された脚は万力のように強く、ベチヨ、ビチャ、と頬や額に貼りついてくる触手の群れから顔を背けることすらできない。

しかも――。

「ンっ!? ンあ……ああおっ!」

天井を向いた尻穴が、グリ、グリ、と穿られた。女王蟲の口から生えた触手だ。先に滲んだ淫毒が繊細な菊膜に擦り込まれ、快楽神経が奮い立つ。蕩けるような肛悦が閃き、懸命に締めているつもりでの括約筋が弛んで――。

ぐ、ぐ……ぐぼぼっ!

「もぷあっ!」

一気に奥まで突き込まれた。

貫かれた肛門が熱く燃え、左右の尻房に凄まじい痺悦が染み渡る。

直腸を貫いて結腸孔まで達した細長い触手は、

ボコ、ボコ、ムチチッ!

滑らかだった表面に大小の肉イボを膨らませ、拳をいくつも連ねたような太い数珠に変化した。

(くううっ!? こ、壊れる……お尻、壊れ、ちゃ……あつ!? あああっ!?)

メキ、メキ、モココッ!

ボコボコ、ムリリッ！

口の中に差し込まれたペニス状の触手も、仰向いた膣穴に何本も挿し込まれた触手も、淫毒に濡れた側面にいくつもの肉胞を膨らませた。押し潰された舌が甘く痺れ、磨り潰された膣壁に凄まじい電撃が炸裂する。

「え、ああ……め……もぶあっ!? えあ、えああ、ええあ、ええあああっ！」

グポポッ！ グポポッ！ グポポッ！

限界まで伸びきった尻穴を弾きつつ、太い数珠と化した肉紐が抜き差しされた。

膣に潜り込んだ肉紐も負けじとばかりに振動し、触手に挟まれた繊細な粘膜隔壁が揉みくちやにされる。

硬い尖端に結腸孔を抉られると熱いモノが爆発し、内臓を衝撃が走り抜けた。

グチュングチュンと鳴らされた膣穴には凄まじい感覚が渦巻き、蟲脚のつけ根に押しつけられて歪んだ孕み腹に心地よい痺れが染み広がる。

（ああ、ダメ、ダメ……そんな、激しく、され……た、らああっ！）

肛門を貫いた肉紐にズズン、ズズン、と排泄器官を抉られるたび、逆さになった背筋を快感の電流が駆け抜ける。

小さなイボを無数に生やしたペニス状触手に喉奥を突かれると、頭のうしろに熱いモノが爆発し、全身がカアツと熱くなつて、甘酸っぱい汗の霧が噴き出した。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>